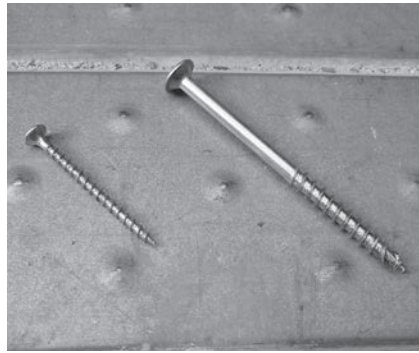




設置されているチタン亜鉛合金板(中央)



平瓦を止める十センチもある特注の釘(右)

ない「空葺き」工法が用いられてい
ますが、その平瓦と平瓦との隙間を
守る丸瓦を葺く際には葺き土を使用
しています。なぜなら、平瓦は十セ
ンチほどの大きな特注の釘を用いて
屋根の椽木に直接固定されています

が、丸瓦の一つひとつにはしっかりと
固定するためのものがないからです。
丸瓦を葺く際には、まず平瓦と平
瓦との隙間に棒状のポリエチレン発
泡体を(写真右頁・中段)埋め込みま
す。そしてその上に「南蛮漆喰」と呼
ばれる葺き土を置いて、そこに丸瓦を
葺いていきます。また、その際に椽木
に取り付けた銅線で全ての丸瓦を固
定していきます。この時、葺き土が多
すぎると雨がしみ込んで湿気ってし
まい、少なすぎると固定がうまくい
きません。葺き土の量の微妙な調整
は職人の経験によって決まります。

また、丸瓦は銅線に加えて六〜七
枚毎に真鍮の釘で打ちつけてさらに
固定させており、その部分にも今回
の御修復では新たな工夫が取り入れ
られました。丸瓦の中央には釘穴が
空いているのですが、その開口部の
周囲を盛り上げ、浸水を防ぐ工法を
取り入れました。こうした工夫によ
り、雨露による腐食などから屋根面
を守ります。

また阿弥陀堂に葺かれていた瓦は
明治期の再建では凍害などにより破
損が見られましたが、今回の御修復
で用いられた新調瓦では凍害に耐え
られるよう当時の形を保ちつつ新

しい工法で作られています。瓦を製
作するときの温度を上げることで
(約二百℃の上昇)、耐圧性・耐久
性を向上させ、吸水性を下げるこ
とで瓦を凍害から守ります。さらに、
万が一瓦が破損してしまっても雨露
が浸水しないようにそれら平瓦の下
にはチタン亜鉛合金の板をとりつけ
ています(写真・左上)。

そうしたさまざまな工
法ですが、中には実験的
な試みも取り入れられて
います。
御修復に用いられている
材料は基本的に次の百年後
の御修復まで真宗本廟を継
承していくために丈夫なも
のを使っています。両堂
で異なる素材を用いている
箇所もあります。一例とし
て、丸瓦と椽木とをつなぎ
止めるために御影堂ではス
テンレス線を用い、阿弥陀
堂では銅線を用いていま
す。次の御修復の際に、今
回の御修復の結果からどの
ような素材がより修復に適
していたのかという結果が
分かるわけです。



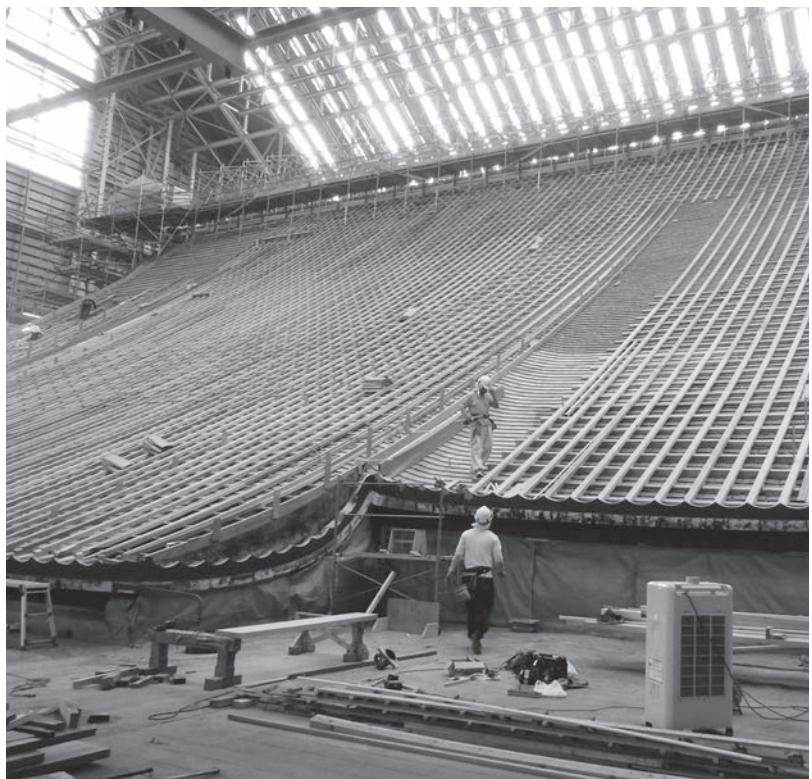
順次葺かれている丸瓦

このように、今般の御修復におい
ては明治期の再建の姿を再現し、次
世代へ先達の願いを受け伝えると
ともに、さらに次の御修復を見据え新
しいさまざまな工法を取り入れるこ
とで、二百年、三百年先へとしか
り伝わっていくようにという願いを
込めています。

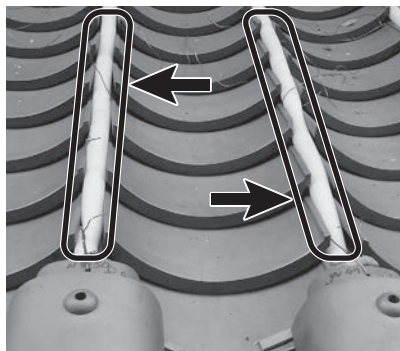


御修復のあゆみ 伝承された先達の願い

阿弥陀堂の屋根瓦の設置工法に施された工夫

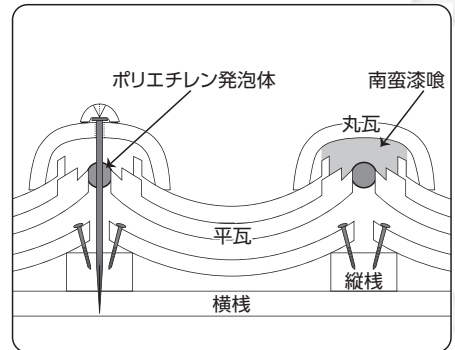


屋根の下地となる土居葺き板の復旧を終えた阿弥陀堂の屋根面



隙間につめたポリエチレン発泡体

阿弥陀堂屋根改修工事における瓦
の設置工法には、細かな工夫がさま
ざまな形で施されています。現在、
阿弥陀堂では屋根の下地となる「土
居葺き板」の復旧作業が完了し、順
次瓦が葺かれています。
そこには、本瓦葺きの屋根面の中
心的な瓦である「平瓦」や「丸瓦」
に加えて、大棟や降り棟などを構成
する「鬘斗瓦」や「獅子口瓦」など



平瓦と丸瓦の断面図

さまざまな瓦があります。中でも今
ご紹介する丸瓦は、平瓦の間の隙
間を雨露から守るために上からかぶ
せて葺くものです。このたびの御修
復ではその葺き方に明治期の再建時
の方法に加え、さまざまな工夫が取
り入れられることとなりました。
今回の御修復の屋根改修工事にお
いて、平瓦を葺く際は葺き土を用い